

【NPJ通信・連載記事】色即是空・徒然草

## 「1984年」の倒錯世界と「茶の本」の和の世界

村野謙吉

本年（2024年）4月から1月間ほど、わたしは自分の人生の終活のような気分でワルシャワに滞在していた。

ポーランドとは人民共和国の体制の頃からの付き合いだ。

様々な思い出が取りとめなく浮かんできた。

1989年、共産党の国家における指導的役割が否定され、国名がポーランド人民共和国からポーランド共和国へと変更された。それから年毎にポーランドは明るく豊かになっていったように感じてきた。

しかし、2022年2月24日、ポーランドの隣国ウクライナへロシアが侵攻した。

「侵攻開始後の10日間で、ウクライナから105万人が国外に逃れ、そのうち最多の55万人がポーランドに入国した」と言われる。（1）

まったくの想定だが、日本海を挟んでいるとはいえ隣国の中国または韓国から一度に数千人の人々が日本海沿いの海岸に様々な船で到着したら、日本人はどのように反応するだろうか。

日本の為政者らは、また日本国民は、このような事態にどのように対処するつもりだろうか。

現在のポーランドは、わたしの観察したところ、ワルシャワの住宅地の公園に7、8人の子どもたちが遊んでいれば、1人はウクライナ人の子供である。

たまたま3ヶ所のホテルに滞在したが、客室を清掃する女性たちは、ほとんどウクライナ人の避難民だった。

戦闘中のロシアとウクライナを含む7カ国と国境を接しているポーランドの政治状況の複雑さは、列島日本の政治家たちには想像もできないだろう。



（外務省ホームページ）

それでもポーランドには、一種の国民的暗黙の一体感が感じられて、治安もよく人々は穏やかに暮らしているように見える。

\*\*\*

かってヒトラーのファシズムとスターリン的全体主義に支配されたワルシャワから、複雑な思いを持って平穏な日本に帰国してまもなく5月15日、風光明媚なタトラ山脈のあるポーランド南部と国境を接するスロバキアで、ロベルト・フィツォ首相が同国中部の都市で銃撃された。

地球全体が内戦化しているような現在、かつての米ソ冷戦の基本構造は維持され、進化した米露の対立となった。

そこに中国が存在感を増して加わり、世界の対立状況は、これまでの歴史では考えられないように複雑で流動化しているようだ。

このような世界状況にインターネットのデジタル情報世界が地球の隅々に有機的に浸透し、国籍と国境を横断して各地の歴史的伝統を攪乱し、現在は、全体主義的な支配情念が世界中の人々の生活を支配しているような状況なのではないか。

そして今、常に背後から語りかけてくるような透明な認知戦の罨に気づくためにも、ジョージ・オーウェルの『1984年』を改めて熟読する必要があると感じている。

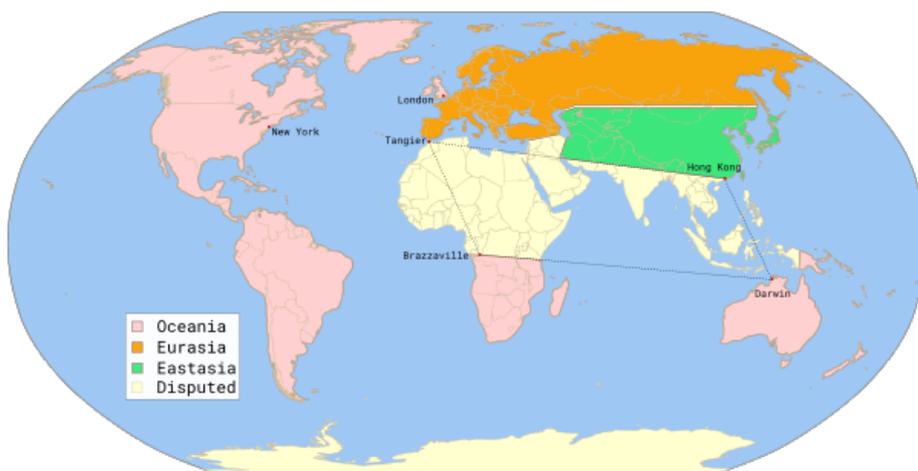
\*\*\*

オーウェルは、当初「ヨーロッパ最後の人間 ( The Last Man in Europe )」のタイトルを考えていたが、執筆を終えた1948年の最後の二桁を倒錯して無機的でデジタルな響きを持つ「1984年」となった。

わたしは1984年7月、作品『1984年』にちなんでロンドン大学で開催されたセミナー「バーナード・クリック教授主催のオーウェル・サマースクール」に参加した。

クリック教授は講演後、自分は読めないからと言って自著のオーウェルの評伝の日本語訳に自署して下さった上、パブにも誘っていただいた思い出がある。

わたしの手元にある『1984年』の原書は、1984年に出版された詳細な参考文献と索引のあるクリック教授のテキストである。(2)



『1984年』の世界：オセアニア（ピンク）、ユーラシア（オレンジ）、イースタシア（黄緑）。それらの間の白い地域は紛争地域と非居住地域。エアーストリップ1号（イギリスに相当する地域）はオセアニアの所屬。（出典: フリー百科事典『ウィキペディア』）

『1984年』には様々な読み方があるはずだが、この作品は、ギリシャ哲学のプラトン以来、西欧の知性の暗部に深く根ざした全体主義の黙示録である。その文献的考証については今は述べない。

そして、見方を変えて読み込めば、本書には支配者に有益で、かつ高度に危険な支配思想のソフトが組み込まれていると見ることもできる。

その意味において『1984年』を従来の共産主義体制の批判書と言う風に表面的に理解するのは禁物だ。

\*\*\*

クリック氏の注釈を参考にしながら読んでゆくと、ユダヤ・カトリック的情念が深く沈殿したかのような雰囲気の中に、現在の中国の台頭を予想していたかのように、世界は常に相互対立する3つの全体主義的超国家の勢力に分断され、そのうちの2大勢力の闘争が常に維持させられている。

『1984年』は、1と2と3の数を高度に象徴的に適応した言説であり、読者の世界政治に対する意識の深化に応じて、常に新たなメッセージが現れてくる。そこで3大政治勢力は象徴的な表現であって、現実の世界政治勢力と地理的にピッタリ符合しなくてもよい。

本書には、権力の本質、歴史の改竄、拷問を含む高度な洗脳技術、人間をunperson化(非人間化)する仕組み、人類の総背番号制、「自由」の言葉の背後の支配情念、個人的独裁者か少数エリートの権力組織か永遠に不明のBig Brotherなる権力中枢、二重思考、エリートと大衆の分断などの様々な問題が黙示的に複雑にからみあっている世界が描かれている。

オセアニアにあるエアーストリップ1号(イギリスに相当する地域)を管轄する4つの省のうちの真理省は、情報管理・操作を行う最重要な部署である。

そして、オセアニアを支配する「党」が掲げるのは3つの矛盾した内容のスローガンだ。

戦争は平和 (WAR IS PEACE)

自由は隷属 (FREEDOM IS SLAVERY)

無知は力 (IGNORANCE IS STRENGTH)

このスローガンのアイデアは、実はオーウェルがシェークスピアの作品のなかで最も評価している「マクベス」の冒頭に紹介される3人の魔女が発する矛盾した多義的呪文: “Fair is foul, and foul is fair” に由来するだろう。

魔女たちが唱えるこの多義的呪文の和訳は、「公正は不正」、「綺麗は腐敗」などであるが、この呪文が使用される文脈によって、いかような意味にもなる。「公正は腐敗」かもしれないし、「腐敗こそ公正」かもしれない。

だが、これら3つのスローガンを唱え続ければ、正常な思考がに解体され、倫理観が麻痺してしまうだろうし、やがて麻痺していることにも気がつかなくなるだろう。

特に戦後マッカーサーの支配政策、さらにアメリカ政治全体の深層に働く支配情念、それらをさらに包み込んでいるアングロサクソンの言語支配構造の中にすっぽりと包み込まれていることに日本人が気がつくためにも、そして善意の各国の国民感情と悪の支配情念とを混同しないためにも『1984年』は必読書である。

ちなみに、父子2代にわたって大英帝国の植民地支配を実体験したオーウェル自身は、シェークスピアの英語を愛読し、イングランドの郷土に愛着し、反エリート主義で、人間嫌いとは程遠い、ささやかな庶民の家庭生活を限りなく愛おしむ人であった。

\*\*\*

『1984年』が提示する支配の本質はなにか。

それは、「自由」と「法治主義」という何人も是認せざるえない表層言説を掲げ、同時に二重思考の深層言説を使う全体主義的支配である。

それは、「自由は隷属である (FREEDOM IS SLAVERY)」のスローガンの表層の矛盾言説をさらに進めて、それぞれの西欧の「自由」と「法治」にも、西欧知識人の中に人種的差別にもとづく支配思想があることを『1984年』は前提としている。

「賢明なる存在である神 (God) が、魂、とりわけ善良なる魂を、黒く醜い体に入れておくということは信じがたいことである」ーモンテスキュー『法の精神』

『法の精神』は1748年に出版された。

「共産党宣言」は、1848年に発表された。

『1984年』は、1948年に完成した。

そして『1984年』において行われる支配言説は、「虚偽は常に、真実の一步前に先行している (the lie always one leap ahead of the truth)」という重層的支配言説である。

\*\*\*

中華的伝統を維持した「法治主義」を掲げる中国は、西欧文明の負の成果である『1984年』の世界を承知の上で国家体制を維持しようとしているのだろうか。

『1984年』の世界を鏡にして見れば、中国の一義的な政治的言説と、それにもとづいて行われる政治的・軍事的行動は、いたって無防備に見える。

それとも中国は、中国が構想する世界観が『1984年』の全体主義を飲み込んでゆくと考えているのだろうか。

中国は現在、壮大な「一帯一路」構想を展開し、「中国の夢」は世界に飛躍し、これまで軍事力を背景として植民地政策等で世界を席卷してきた西欧からは疑心暗鬼をもって見られているが、その原動力はなんだろうか。

- ・1840年、イギリス政府の直接指令の下に、当時清朝政府の中国に対する第一次アヘン戦争 勃発。
- ・1842年、イギリスに対して、中国は主権を喪失する「南京条約」に調印。
- ・1857年～1961年、第二次アヘン戦争に中国は敗北。
- ・1894年～1995年の日清戦争（中日甲午戦争）に敗北。
- ・1900年には、8カ国連合軍の北京侵攻に敗北。

その結果、「中国政府は列強の鉄砲の脅しのもとに700余りの不平等条約を結ばされ、領土割譲、賠償金支払いなどの恥辱を舐め尽くした。」（3）

その屈辱を背景に、中国は国家の統治方法にマルクス主義を採用し、長期的展望のもとに万里の長城を超えてグローバルに国運を展開しようとしているようだ。

一方、日本は、終戦後も米軍基地を全国に駐留させ、首都圏一都九県に及ぶ空域はアメリカ軍の管轄下にあつて、日本海を隔てて中国と向き合っている。

そして、一部の日本のマスコミと評論家は、中国のアフリカ進出に危惧を抱き、時に反中を煽り、テレビでは日本文化を欧米の外国人に誉められて喜んでいる多くの視聴者たちがいる。

いったい文明的視座において、日本という国家の歴史的価値観と将来の国運を日本の政治家たちは、どのように考えているのだろうか。

\*\*\*

『1984年』の世界において、日本人がもっとも留意しなければならないことは、中国やアメリカではない。

日本人の内なる、典型的に旧日本軍の一部に見られた自国民差別の、そして戦後は、一部の知識人たちに見られる媚米、嫌中のいびつな深層情念である。

1970年頃、親しくしていた在日マレーシア大使館のマレー系の商務官は、ある時彼の執務室で、自分には済んだことに特別な恨みもないがと言って、マレー半島における一部の日本兵の残虐な行為を具体的に語ってくれた。

かって旧日本軍飛行隊員が住む一部屋のアパートを訪れたことがあった。独り住まいの彼の部屋の片隅には、日本刀が備えてあった。

そこでわたしが直接聞いた話は、極限的状况で日本兵同士が殺し合う修羅場であった。

「わがごろのよくて殺さぬにはあらず。また害せじとおもふとも、百人・千人を殺すこともあるべし」親鸞が指摘する究極の悪業の世界を語ってくれた。

映画「蟻の兵隊」に描かれた、中国大陸に部下たちを見捨ててさっさと帰国した上官たちは、その後どのような生活を送っていたのだろうか。

帝国軍隊の一部に温存された忌まわしき情念と無知は、明治維新前から始まって日清戦争で肥大化し、終戦を経た今日でも温存されているのではないのか。

もちろん、軍の上層部の命令の下に、戦地へ駆り出された多くの日本兵は本来は善良であったろう。

わたしは、1970年ごろペリリュー島（現在のパラオ共和国）を訪れたが、年配の住民は日本語を話し、かつての日本人をなつかしむ人々であった。1943年のパラオ在住者は33,000人で、その内の7割は日本本土、沖縄、日本が統治する朝鮮や台湾などから移り住んできた人達であったという。

移住してきた人々は現地人と平穏に共存していたのであろうが、当時この島を統治していた軍人も原住民に対して平等の態度で接したという。

\*\*\*

しかし『1984年』の極限的な欺瞞の世界は、従来の人間性の残酷さとは異質の情念を黙示している。

『1984年』の世界においては、個人的独裁者か少数エリートの権力組織か永遠に不明の Big Brother なる権力中枢によって世界の人々は支配されているが、具体的には常に相互対立する3つの全体主義的超国家の勢力に分断され、そのうちの2大勢力の闘争が常に維持させられている。

しかし、闘争や戦争の悲劇を経験するのは一般の兵士と国民であり、戦中・戦後に実際に指揮をとり責任を負うのは、当事国の大統領・首相・独裁者であり、通常の法体系外である権力中枢に責任は及ばない。

「わたし」たちは、今後どのような心の価値観で生きてらよいか。  
東洋軽視と西欧コンプレックスが混在した思考に侵食された、特に戦後日本における一部の保守と進歩派の知識人たちとは違って、明治時代に、西欧の覇権文明の本質を敏感に感知し、英文で日本の伝統的価値観、美意識にもとづく心の価値観を世界に紹介した健全な心の日本人がいた。

岡倉天心だ。

かって三ヶ月間ほど完全点滴の入院生活を送っていたとき、わたしは病床で岡倉天心の『The Ideals of the East (東洋の理想)』を読んでアジアに目覚めた。

岡倉天心の心の価値観は、西欧的な正邪・善悪の観念ではなく、東洋的美意識を身体感覚で受け止めて生きてゆく「和の世界観」である理解している。

そして岡倉天心の東洋の心の価値観は、幸いにご面識をいただいた鈴木大拙師の志ともつながっている。



岡倉天心 (Wikipedia)

「西欧人は、日本が平和でもの静かな芸能に身を任せていた間は野蛮国とみなしていたものだが、日本が満州の戦場で大規模な殺戮に関わって以来、日本を文明国と呼んでいる。

彼らは、最近では武士道、つまり吾等がサムライたちをして自死することに狂喜させる死の儀礼 (Art of Death) に大いなる関心を寄せているが、吾等がいのちの芸術 (Art of Life) と呼ぶべき茶道にはほとんど注意が向けられていない。

文明というものについての我々の主張が、戦争という身の毛のよだつ栄光であるなら、我々はよろこんで野蛮人でいたいと思う。

我々の芸術と様々な理想に対して正当な尊敬の念がなされる時がくるまで、その時を我々は喜んで待ちたいと思う。」

(岡倉天心「The Book of Tea (茶の本)」)

天心とほぼ同時期に、日本人の心の価値観を英文で西欧に表明した二人の人物がいた。

内村鑑三と新渡戸稲造である。二人は札幌農学校に学び、函館に駐在していたメソジスト系宣教師から洗礼を受けてクリスチャンとなった。

その後、内村は1884年に私費で渡米したが、拝金主義と人種差別の流布していたキリスト教国の現実を知って幻滅、4年後に帰国してアメリカのキリスト教と一線を画した日本独自の無教会主義を唱えた。彼が愛したのは「二つのJ」すなわちJapanとJesusであった。

新渡戸も1884年、「太平洋の架け橋」になりたいと渡米、伝統的なキリスト教信仰に懐疑的となり、やがてキリスト友会 (クウェーカー) の正式会員となった。

1891年、妻メアリー・エルキントンを伴って帰国。その後国際連盟事務次長として活躍した。

内村鑑三の「Representative Men of Japan (代表的日本人)」は1894年に出版された。

新渡戸稲造の「Bushido: The Soul of Japan (武士道：日本の魂)」は1899年に出版された。

そして岡倉天心の「The Book of Tea」は1906年に出版された。

天心が内村鑑三と新渡戸稲造の、それぞれに独自の日本人観に、どのような批判的評価をしていたのかわからない。

天心の「いのちの芸術」は茶道であるが、「The Book of Tea」は、趣味で飲むお茶についての本ではない。

『1984年』の世界が「戦争という身の毛のよだつ栄光」を維持する究極的世界であるなら、そこは「わたし」たちが「よるこんで野蛮人」でいることを許されるような現実ではないだろう。

それでも『茶の本』の世界は、東西文明論も含めて、鋭い歴史的文化的政治的洞察に満ちた著作であり、日本的自己確認の言説である。

本書は、簡潔かつ印象的な千利休の自刃、つまり天心が批判した「死の儀礼」の場面で終わる。

\*\*\*

ポーランドの思い出からオーウェルの『1984年』に話がおよんで、取り止めもなく様々の思いに悩まされながら『茶の本』にたどり着いた。

地球全体に、未曾有の異様な闘争精神に満ちた流れを感じるのは、「わたし」の妄想であろうか。

日本に生まれ育った多くの日本の「わたし」たちは、毎日のひと時、心を鎮めて一碗の茶を口に含んで、和敬清寂の心の価値観を確認しようではないか。

これまでの人類史を大観し、人種的偏見を超えて、東西を超えた文明的大局観のもとに、それぞれの国家における「和」の世界を目指してゆこうではないか。

(2024/06/25)

-----

・村野謙吉: 仏教・日本文化・G.オーウェル研究家; 翻訳家; コラムニスト(Mainichi Daily News (1978 - 1983) など)。訳書: ヴィンセント・スティアー『プリンティングデザイン・アンド・レイアウト: 欧文書体とレイアウトの常識』など。

\* 本コラムの初出: 【NPJ通信・連載記事】色即是空・徒然草

「1984年」の倒錯世界と「茶の本」が教える和の世界(2の1) 2024.06.13

「1984年」の倒錯世界と「茶の本」が教える和の世界(2の2) 2024.06.20

\* 本文、引用文の誤記、一定の内容について意図しない誤解などがあり訂正したい。(筆者)

(1) 新潮社 Foresight: 「3800万人の国に960万人が流入ーポーランドがウクライナ避難民受け入れに成功した理由」2023年3月1日 三好範英

(2) GEORGE ORWELL *Nineteen Eighty-Four With a Critical Introduction and Annotations*: OXFORD, 1984.

(3) 李君如『中国の夢とはどんな夢か?』(原文・『中国梦、什么梦?』) 外文出版社, 2014年.